

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
はらだ ひさし 原田 久史	男性	93歳 H27.8.15 現在	23歳	設楽町

「戦艦大和でレイテ沖海戦へ」

戦艦大和は、全長263m、乗組員が3300人ぐらい、主砲は46cmの口径で、42kmの射程がありました。当時、世界最高の船ですから、船対船の戦いなら負けることはないと思っていました。しかし、昭和16年（1941年）、17年頃には飛行機が飛躍的に発達し、ミッドウェー海戦をはじめ、日本海軍が誇る連合艦隊は米軍の航空部隊に敗北を重ねていきました。不沈神話で日本は負けないことになっていましたが、米軍の航空機にはなすすべもなかったのです。

○ 戦艦大和の乗組員に

私は、昭和17年（1942）1月に海軍に入りました。5ヶ月新兵教育を受け、その後で大分の宇佐航空隊へ配属され、続いて横須賀航海学校行きを命ぜられ、気象術を学びました。飛行機の重要さが増し、気象要件が必要になってきたためだったようです。気象学校を卒業すると、大分の第12連合航空隊司令部に配属となりましたが、わずか半年後の昭和18年（1943）5月、戦艦大和の気象班として大和の乗組員となりました。

当時、海軍の基地は横須賀、呉、佐世保でした。武蔵の基地は横須賀、大和の基地は呉で、愛知県から山口までの西日本の乗組員は呉に行きました。

○ レイテ沖海戦

昭和19年（1944年）に入ると日本の劣勢は明らかとなり、陸軍ではニューギニア、ガダルカナルなどで何万という兵士が亡くなりました。海軍は、ミッドウェー海戦で空母4隻が撃沈され、艦載機も失ったため、アメリカに制海権、制空権を握られていました。そのため、連合艦隊はそれまでの拠点だったトラック諸島からボルネオの近くのリング基地まで移動しました。

19年10月20日頃、連合艦隊はアメリカ軍のレイテ島奪還を阻止するため、捷一号作戦を開始しました。ブルネイの港で燃料を補給し、レイテに向けて出航しました。米軍が輸送船団を置き、軍艦も集結しているという情報が入ったからです。シブヤン海に入る手前のパラワン島に近づくと、アメリカの潜水艦が待機していました。第2連合艦隊の旗艦は巡洋艦の愛宕でしたが、23日の朝6時半頃、魚雷が愛宕に命中し、



試験運航中の戦艦大和 提供:大和ミュージアム

ものの10分ぐらいで沈没してしまいました。後続の巡洋艦、摩耶も沈没しました。愛宕には司令長官の栗田中将が乗っていました。栗田中将等は9時間かけて救出され、大和に移りました。大和が旗艦となって中将旗を掲げ、やっと24日、レイテ沖に向かう体勢が整いました。

しかし、この時の戦争は船と船との戦争ではなく、相手は何百機という戦闘機でした。しかも連合艦隊には護衛できる戦闘機はほとんど残されておらず、米軍機の集中攻撃にさらされました。米軍機は、陸上基地、空母から1波、2波、3波、4波と入れ替わり立ち替わりやってきます。1波で100機ぐらいの戦闘機が来ます。戦闘の時間はせいぜい30分ぐらいですが、次々と爆撃されました。大和の目になる専門の見張りが100人ぐらいいて、双眼鏡で報告していました。

私は、艦長のすぐ後ろにいました。艦橋配置だったので、ビルの7階、40mほどの高さの防空指揮所にいました。すべての報告が艦長に集まります。見張りが、「右何十度、飛行機！」と叫びます。戦闘機があつという間に迫ってきます。魚雷を抱いた雷爆機が低空飛行で迫り、上空からは急降下爆撃機が爆弾を落とし、さらに機銃掃射を浴びせます。応戦はほとんど間に合いません。レーダーでなく双眼鏡の目視に頼った対応では、戦闘機の攻撃に太刀打ちできないのです。自慢の主砲や副砲は、艦隊決戦にならなければその威力を発揮することはできなかったのです。

甲板の上は、血や内臓が飛び散っています。首がない死体も見えます。

「ぐうえ」という、うめき声が聞こえ振り向くと隣の兵隊が爆撃を受け、私にもたれてきました。爆弾の破片であごから首を貫かれ血があふれています。抱き抱えると、白い戦闘服が赤く染まりました。即死です。甲板に下ろしましたが、命はありませんでした。私も足をやられて、鮮血が流れていましたが、大したけがではありませんでした。まわりには何人もやられた人がいました。上にいる兵士は無惨なものでしたが、下の兵士は状況さえよく分からないのです。自分は悪運が強くて生きて帰りましたが、戦友の多くが亡くなるのを見ました。

24日は、それが5波ぐらい続きました。下の医務室はごった返していました。応急隊がタンカで運びますが、軍医官は治療の施しようがないほどでした。甲板では、弔いのために飛び散った肉片を仲間がかき集めていました。

その時の大和の艦長は、常滑市出身の森下信衛海軍少尉で、神様のような人でした。艦長は、「敵の魚雷から大和を守る操艦の名手」で、戦況がどうなっても動じることはありませんでした。



攻撃を受ける戦艦大和 提供:大和ミュージアム

「とりかじ30度」,「おもかじ何十度」というような命令を下しました。それを何度も繰り返し,全長260mの巨艦を動かし,魚雷を回避するのです。後に,日本の連合艦隊の操艦の名手として有名になる人でした。森下艦長はどんな攻撃があっても,近くに爆撃機が近づこうが爆弾や弾丸が落ちようが泰然自若,微動だにしませんでした。不思議なことに,私も怖いという感覚がなくなっていました。何も感じない,というのが正しいかもしれませんが……。

○ 死ぬこと

私が所属していた気象班にいた坂根という兵が亡くなりました。第二艦橋付近で倒れ,双眼鏡をかけた胸は血潮で真っ赤でした。大阪出身の19歳くらいの青年で,私の弟分でした。水葬の時,坂根の爪と髪を切り,白紙に包みました。彼の故郷へ送るためです。そして,浮力で浮かないように10kgぐらいの模擬弾を抱かせて水葬にしました。

レイテ沖海戦では,戦艦「武蔵」が魚雷を20発も浴びてシブヤン海に沈みました。武蔵にも3千余名の乗員がいました。弾丸や爆弾を受けて即死した兵も多かったと思いますが,甲板より下にいた若者たちは,生きながら「武蔵」と共に海底に沈んだのです。迫ってくる海水の中で溺れ,呼吸を奪われ,死んでいったのです。その無念,恐怖,苦しみを思えば,いっそ,あつという間の即死の方がどんなによいか,どんなに楽であったことか,このことを思う時,胸が張り裂けそうな気持ちになります。海軍でなくなった大半の人は,そういう死に方をしました。大和が沖縄で沈んだ時,3300人のうち生きて残った人はたった260人ほどでした。

大和には小黒板がいくつもあって,「総員死に方用意」という指令がありました。これは大和の兵隊全員の心得でもあり,常に死と隣り合わせを意味しました。ですから,死ぬことを恐いとは思いませんでした。兵隊はみんな同じ思いで,いつ死んでもいいという覚悟はできていたと思います。

レイテ湾突入という初期の目的を果たせないまま,惨憺たる敗北を喫してレイテ沖海戦は終わりました。戦艦で残ったのは大和と金剛ぐらいでほとんど沈められました。

大和は,10月28日にブルネイへ戻り,11月24日に呉に入港しました。命からがら日本に戻ったというべきでしょうか。この結果,日本海軍は事実上壊滅し,戦争遂行の生命線とも



建造中の戦艦大和 提供:大和ミュージアム

いえる資源や物資の輸送航路の確保さえできなくなったのです。大和は12月に呉のドックで整備されることになりました。

私は12月20日頃、茨城県の土浦気象学校へ行けという命令を受けました。大和の乗組員を交代させるのは兵力が鈍るから、補充はしても交代はさせないという方針だったので、意外なものでした。鎮守府が、気象学を重要視していたためなのか、気象で一人、信号で4人が交代することになりました。12月30日、同僚の「帽振れ」の合図で私は大和を退艦しました。

私は、「生きるも死ぬも一心同体」と思っていた大和を離れ、茨木の土浦海軍気象学校へ入学しました。九州沖で大和が沈んだのは、それからわずか4ヶ月後の昭和20年（1945）4月5日だったのです。

○ 海軍式訓練法

海軍には、特有の「バッター制裁」がありました。夕食が終わると、「整列！」の聲がかかり、上級兵の制裁が待っていました。司令部の広い廊下に整列させられ、精神注入棒で尻を嫌と言うほど殴られたのです。精神注入棒は長さ1.5m、直径5、6cmほどの檜の木です。最初は赤く腫れますが、1～2日経つと黒あざになるのです。鉄拳制裁も多かったです。「一人ずつ出てこい！足を踏ん張れ！歯を食いしばれ！眼鏡を外せ！」と言って殴るのです。海水に浸けたロープで、尻をバーン、バーンとたたき制裁など、いろいろありました。では、何か大きな失敗をしたかといえ、そうでもないのです。一人が欠礼をした、というような些細なことでも連帯責任でやられるのです。

それでも2年、3年経てば逆の立場になります。みんなその経験をするので、同年兵の結束は兄弟以上になります。連帯責任で殴られると覚えが速いことは確かです。戦争ですから、理屈を越えた強い精神力が必要ですし、強兵養成の手段として悪いことばかりとも言えないのです。善悪を論じるなら、戦争そのものを論じるべきだと思います。

○ 戦争は人殺し

人を殺さなければ自分が殺される。それが戦争です。人が人でなくなるのです。人を大勢殺せば英雄になるなんて、そんな馬鹿な考えがまかり通る戦争は絶対にすべきではありません。

みなさんに一番言いたいことは、弱い人を助けられる人になってもらいたいということです。情がある人になってほしいのです。そして、日本を情のある国にしてほしいのです。弱い人たちを助けてもらいたい、それが私の願いです。



46cm砲の砲弾(一番左) 協力:大和ミュージアム